

# 第 28 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって

---

日本西アジア考古学会会長 西秋 良宏

今年も西アジア発掘報告会の季節がやってきました。前年の1月～12月におこなわれた現地調査の成果や発見を速報的にお知らせする日本西アジア考古学会の定例行事です。1994年以降、回を重ね、今回が第28回となりました。毎回、立ち見が出るような人気企画であるわけですが、昨年は、コロナ禍のため、誌上発表のみとなりました。長い歩みの中でも、2011年の東日本大震災にともなう厳戒態勢以来の出来事であり、楽しみにしておられた方には残念なことでした。

今年こそは通常通りの開催をと念じてきましたが、ご承知のようにコロナ禍はおさまることもなく、オンラインによる開催にすることとなりました。しかし、昨年の今頃なら、一部の方しか使っておられなかったデジタル動画配信技術が、あっという間に普及しました。したがって、国外をふくむ遠方在住の方々、また、会場定員をはるかに超えるほど多くみなさまにも報告を聞いていただけるようになりました。つまり、悪いことばかりではありません。時代の動きの早さには目を見張るばかりです。

通信技術の発展がもたらした恩恵であるわけですが、このように現場(フィジカル)と通信(ヴァーチャル)の融合が当たり前になる社会のことを、内閣府はソサイエティ 5.0 と位置づけています。5.0 というからには、それより前にいくつもの社会が定義されています。1.0 は狩猟採集、2.0 は農耕牧畜、3.0 は産業革命、そして 4.0 はつい先年まで発展が喧伝されていた IT 社会なのだそうです。このような時代区分が意味あることなのかどうか、私たち研究者は独自の目線で評価してよいことです。しかし、現在が、時代の節目にあることは、多くの方々が実感として認められるのではないかと思います。

考古学は、このような長期的な社会変化(の少なくとも前半部)を語るうえで最も強力な学問分野の一つです。中でも西アジア考古学は、格別の意義を持っています。いち早く狩猟採集社会(1.0)から農耕牧畜社会(2.0)への転換を果たし、以後の変革を先導した先史・古代社会を扱うからです。その知見は、研究者のみならず、生徒諸君を含めた一般の方々もが学ぶべきものであると確信しています。

例年、20 を超える日本の調査隊が西アジア各地に出向き、様々な遺跡発掘をとおして生のデータを集め、往時最先端の社会変化の実態を調べてきました。この発掘調査報告会は、日本国内においてそのような大きなテーマについて最先端の研究を報告する稀有な機会を提供する

---

---

---

ものです。

ただし、今年度の報告会は、発信の方法だけでなく、内容も従来とは違ったものになっています。速報すべき前年の発掘調査がきわめて限られたものになったからです。昨年の報告会において、コロナ禍が2020年度の海外渡航を制限することになればよいが、と述べましたが、残念ながらその通りになってしまいました。現地発掘を実施できた調査隊は数えるほどしかありません。

毎年、現地に出向き発掘をおこなってきた研究者にとっては、苦渋のシーズンであったことでしょう。しかし、毎年毎年、現地調査に多大な時間をついやすことは、研究者にとっては研究の進展をうながす一方、トレードオフでもあります。調査が進んであまりにもデータが増え、その分析や公表に割く時間が足りなくなって「研究」がおろそかになってしまう危険が生じるからです。2020年度は現地調査の中断によって、図らずも、研究の現在地をながめ今後の方針を考える時間を得たチームもあったのではないのでしょうか。実は、それは自らのことでもあります。私自身は、今回の中断が、いずれ再開する現地調査の糧をもたらしたとポジティブにとらえています。

今回のプログラムを眺めますと、実際、ここ数年の調査成果をまとめて報告する方が目立ちます。それらの方々においては、より総合的に、かつ深い分析のもと、自らの遺跡調査の意義を語っていただけるものと期待しています。そして、聴講のみなさまには例年とは違った内容を楽しんでいただけることを期待しております。

---

---